

Title	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵橋守部関係書目録(続)
Sub Title	A catalogue of the Shiigamoto Bunko Collection in the Shido Bunko Institute (2)
Author	
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2006
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.41 (2006.) ,p.307- 332
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20060000-0307

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵橘守部関係書目録(続)

はじめに

本誌第三十九輯(平成十七年二月)に「慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵橘守部関係書目録」を掲げたが、その後同種資料若干点を収蔵することを得た。そこで、補遺を作成する。

本稿で扱う資料はいずれも古書肆より購入したものであるが、一点を除き橘家旧蔵と考えられる。

一方、前稿発表後、町泉寿郎・新井通郎・鈴木亮、三氏により「橘守部・純一関係寄贈資料の整理と研究―第一報・和装本類」(二松学舎大学人文論叢)第七十六輯、平成十八年三月)が発表された(以下これを「二松学舎解題」と称する)。これは橘家資料の内、昭和十四年の売り立て後、橘純一氏の手元に残され、近年二松学舎大学に寄贈された資料の解題である。それによると、橘純一氏個人の蔵書もあるが、守部以下橘家歴代の草稿や書簡、来簡をふくんでおり、守部研究上、さらには、明治期の旧派和歌の動向を探る上からも価値があると思われる。

本文庫購入資料と二松学舎大学へ寄贈された資料との関係については今明らかでないが、本来出所を同じくすると思われ、資料的に相補完する面がある。従って、両者の比較検討が必要であるが、二松学舎大学所蔵分については、「第一報」とあるように鋭意整理中とのことであり、とりあえず本文庫所蔵分の概略を示して今後の調査に備えたい

と考える。本稿の執筆を急いだ所以である。

なお、前稿と同じく平澤五郎氏「橘守部撰述諸稿本とその成立に就いて(一)〜(三)」(「斯道文庫論集」第十七、十九、二十輯、昭和五十六年二月、五十八年三月、五十九年三月、以下「平澤解題」とする)を適宜参照する。また、引用の際、前稿に倣って頁数の表示を行う。(川上新一郎記)

〔追記〕校正中、町、新井、鈴木三氏による「橘守部・純一関係寄贈資料の整理と研究―第二報・橘守部判『音声歌合』」(「二松学舎大学人文論叢」第七十七輯、平成十八年十月)に接したが、本稿に直接関わることはない。

さて、本文庫新収資料はほとんど草稿断片や詠草類であるが、以下のごとく、A橘守部関係、B橘冬照関係、C橘東世子関係、D橘道守関係、Eその他と分類した。〔清渚集草稿〕断簡』『橘守部教訓書幅』『江之島鎌倉記行 一名忍艸』の三点が別途購入、他は一括購入である。

なお、本文庫では橘守部及び橘家の資料の内、貴重書は「09A」とし、以下小番号を付している。今回の資料は全て貴重書とは到底言い得ないが、整理の都合上一括して、「09A」として整理した。書名の頭に付した99から129の算用数字は、それぞれ函架番号が「09A-99」から「09A-129」であることを示すものである。

A 橘守部関係

99 撰格叙 試草 吉田秋主・山藤清風 守部筆 一冊(注1)

100〔清渚集草稿〕断簡 守部筆・一部他筆 七一枚(注2)

- 101 千代古道 存次輯卷一—三 橘道守訂輯 道守筆 三冊(注3)
- 102 俗語考 存天—能 橘守部輯 道守訂 道守筆 二冊(注4)
- 103〔橘守部教訓書幅〕 自筆 一幅(注5)
- 104 陰中詠草 橘守部 東世子筆 一冊(注6)
- 105 八十一番歌合 弘化三年六月十二日 判守部 写本(東世子筆力) 一冊(注7)
- 106 行草類字 外題 守部筆 一冊(注8)
- 107〔行草五十音類字〕 守部筆 一冊(注9)

B 橘冬照關係

- 108 家隆卿百題詠草 外題 自筆・〔守部〕書入 一冊(注10)
- 109 椎本叢書 存一、三 外題 自筆 二冊(注11)
- 110 冬照雜書 外題 自筆 二冊(注12)
- 111 河海抄目案 自筆 一冊(注13)
- 112 南山独録抄 外題 冬照筆 一冊(注14)
- 113 詩集 外題 冬照筆 一冊(注15)

C 橘東世子關係

- 114〔橘東世子詠草〕 自筆・一部冬照筆カ 一冊 外題「□代の古道草稿一」(注16)
- 115ならのおち葉一 外題 自筆 一冊(注17)
- 116詠草 外題 自筆 二冊(注18)
- 117藻塩草 外題 自筆 一冊(注19)
- 118磯の藻くつ 外題 自筆 一冊(注20)
- 119〔詠草〕 自筆カ 一冊 外題「萬葉檜柀積語例」(注21)
- 120江嶋記 自筆 一冊(注22)
- 121涼の記 外題 自筆 一冊(注23)
- D 橘道守関係
- 122道守家集 自筆 一冊(注24)
- 123椎の小枝 写本 一冊(注25)
- 124江之島鎌倉日記行 一名忍艸 外題 自筆 一冊(注26)
- E その他
- 125橘濤子詠草 外題 自筆 一冊(注27)
- 126濤子詠草第三 外題 自筆 一冊(注28)

127 橘守枝詠紳 第二集 外題 自筆 一冊 (注29)

128 詠草 外題 自筆 (詠者未詳) 一帖 (注30)

129 (詠草) 自筆 (詠者未詳) 一冊 (注31)

〔注〕

(1) 仮綴、表紙なし、(二四・五×一七・〇糎)。内題、「撰格叙 試草」。料紙、薄葉(裏打)。墨付、六丁。守部の『長歌撰格』のために用意された弟子吉田秋主と山藤清風の序文を収める。清風の文の末尾に、「天保三年九月三日 山藤清風誌」とある。二文とも守部の筆跡である。また、清風の文については、道守と思われる筆跡で、訂正がある。吉田秋主は守部の弟子であり、後援者としても著名な桐生の吉田清助、山藤清風も同じく守部の弟子で「下蔭集初編作者姓名」に「清風 同(足利)郡小俣村郷十号外山庵 山藤政八」と見える人物である。秋主の序巻頭「大海の原に風ふけは、なきて後にもなこりの波しつまらず、古言学ひは継人もあらずなりにた

れと、なこりの音猶かしかまし、その音、磯うつ浪の音はかりもたてす、松吹風の声はかりも聞えず、た、岸へのあしのむら蘆、おのかむき／＼うちそよくはかりなり、」(読点、濁点まま)。

清風の序巻頭「やむ事なき御あたりには、ことなるみさためもおはすらめと、そはうか、ひしるへきにあらざれば、此書のおつかる所にはあらず、只わか輩、(ママ)ちかしもとちのうへにていはんに、歌にまれ、ふみにまれ、今世の人の、よしとゆるすも、たのみかたく、あしとうけぬも、たのみかたし、よしといふも、よく見しりてにはあらず、あしといふも、よくき、わきてにはあらず、」(同右)。

本書は従来未紹介であるが、既に本書のようなものが

あることは予想されていた。

守部の『文章撰格』『長歌撰格』『短歌撰格』は併せて三撰格とされ、守部の自負する名著であった。守部は生前、天保二年から五年にかけて出版を企て、版下もしくは校正刷にまで至ったと見られるにもかかわらず、なぜか出版にいたらなかった。その後、守部は改稿をくり返し、出版されたのは、その没後、明治になり、孫道守の手によってであった。

天保時の出版計画については、吉田秋主宛守部書簡を検討された徳田進氏によって事情が明らかにされている。特に本書と関わるのは、天保二年八月二十四日付及び同年十一月二十六日付書簡である。(徳田氏『橘守部と日本文学―新資料とその美論―』第七章、一九〇頁、昭和五十年刊、初出昭和三十三年三月、平澤解題一七―一七六にも引用がある。)

八月二十四日付書簡には「先今後長歌撰格清書一部呈上仕候。序文も貴君と清風君と二篇下稿仕候二付今夜

熟読仕後便差上可申候。」十一月二十六日書簡には「序文は長歌之方ニ附候而以下は何もなしに致候積ニ御座候。即貴君、清風主兩人の序文先達而一寸稿仕置候但し文章撰格之巻尾ニ豊主(小佐野豊、稿者注)跋文付之方可然歟御勘考之上いつ成共も仰被下候。」とある。

これによれば、金銭面その他で援助を受けた秋主、清風に謝意を表するため、その名を借りて序文を付すことになり、守部が代作した事がわかる。本書はその守部の代作稿である。日付は書簡の約一年後であるが、改稿されたのであろう。

さて、明治になって、三撰格は孫道守によって刊行されたが、時勢も変わり、二人の序文は採用されないこととなった。刊行された三撰格はいずれも序跋を有するが、当時現存の著名人もしくは道守自身が執筆している。ところが、『短歌撰格』(明治十八年刊)の道守跋は次のように始まっている。

歌にまれ文にまれ今世の人のよしとゆるすもたのみ

かたし悪しとうけぬもたのみかたしよしといふもよく見しりてにはあらずあしと言ふもよく聞わきてにはあらず

これを本書の清風序文と比較すると、冒頭を省略し、合点の箇所より始まり、以下同一であることがわかる。

さらに比較していくと、道守の序文は、守部代作清風序文の流用である事が判明する。また本書の書入訂正は道守が自ら改作した痕跡を示すものである。「吾か橘の守部の大人」を「吾か祖父守部か」、「吾大人は」を「祖父は」に改めた箇所もある。

つまり、『短歌撰格』道守跋文は、守部が代作した清風序文を道守が改作し、自らの署名を付したものである。

(2) 和歌を一首もしくは数首書いた紙高二〇糎内外の短冊状の楮紙紙片多数。朱で分類のための題を記入する場合がある。筆跡は多くは守部であるが、他筆も混じる。この紙片は天保年間守部が企てた大部の類題集『清渚集』草稿の内、まだ排列して貼込まない分である。桐

生吉田家には、貼込んだ分三十二冊（春部、但し半ばまでであろう）と貼込まない分約六千枚があるとされる（徳田進氏前掲書第十章参照）。本文庫所蔵分は暮春と恋が多い。徳田氏は守部の他、編纂に協力した冬照、吉田秋主、さらには星野貞暉の筆写になるとされる。

(3) 黄色地八つ藤丸卍繫空押艶出表紙（二三・六×一七・一糎）。外題、金砂子散題簽「千代のふる道」次集

一「（第一冊）、「千代古道」次集 二「（第二冊）、「千代の古径」次集 三「（第三冊）」。内題「千代古道次編第一巻」「千代の古道次編卷第二」「千代古径次編卷三」。

内題下にそれぞれ「橘道守訂輯」「襲業 橘道守編輯」

「嗣業 橘道守編輯」と署名する。尾題、「千代古径後編

第一終」「千古廻布流道次編二畢」「千世古道次集三終」。

料紙、薄葉。墨付、第一冊五十八丁（丁付に誤りあり）、第二冊六十六丁、第三冊六十二丁（丁付に誤りあり）。

巻一卷頭に「本編は守部か考置たるを五十音もて分置しか猶こ、かしこより教子等に答たる折の考あるは思ひ

よれる事人伝事なとかりそめに反古のやうに書置るを探得てとみにとりほとき見れは父冬照の考も最多ありけり是迄しらざりしをなけき且見出たるをよるこひ次ミしるし置になん一段の上に祖とあるは守部か考父は冬照か考人伝事は祖父しるし置も父のもその次手ミに書つめ置になん 明治六年十二月 道守しるす」、卷二巻頭に「此一本は祖父守部の考のみなり見ん人そのこ、ろしたまへ」、卷三巻頭に「此一巻も祖父橘守部かしるし置しを書つらねたるなり」とある。まま図をまじえる。

本書は道守のはしがきにあるように、道守が祖父守部、父冬照の草稿、反故類をまとめて書写し、一書としたものである。題名などから、一見本文庫蔵『千世乃古道初編』三卷三冊（09A-44）の続編のごとくであるが、実はその大半を含み、さらに、それ以外の項目を多く有するもので、一種の増補本である。

本書三卷の内、卷二は初編卷二、卷三と項目順をふくめてほぼ同一である。卷三の前半は若干の例外を除き、

初編卷一と同一である。卷一と卷三後半は『千世乃古道初編』には見えぬさまざま項目の集成であり、冬照の草稿による著作もふくまれ、他に見出せないものが多いようである。卷一には、守部の「女子訓誡哥并短歌」（かなり長い長歌と短歌十首で従来知られないもの）、卷三後半には、後述する「陰中詠艸」や「古代の髪の考」（天理図書館に自筆本あり）などもふくまれている。

なお、本文庫には前掲本の他に『千代古径』九冊（09A-43）を蔵するが、該書は書名を同じくするも、『雅言考』に類するもので本書とは関わらない。

（4）素紙表紙（二四・一×一七・〇糎）。外題、「俗語考 天の部 道守訂」（「天の部」の左横に「止の部」とペンで書き添う）、「俗語考 奈行」（ペン字）。内題、各冊とも「俗語考」。内題下にそれぞれ「橘守部輯／孫道守訂」「橘守部／橘道守校訂」とある。料紙、薄葉（全丁裏打）。墨付、各六十九丁、八十丁（丁付に誤りあり）。第一冊登の部末に「明治十一年二月十八日畢業／

橘道守手記」とある。

本書は天理図書館蔵『俗語考^{浄書本}』十三冊の次に接する二冊である。ただし、装丁は天理本と同じくしない。

それぞれ「天・登」「奈・尔・奴・祢・能」を収める。

『俗語考^{浄書本}』は、同じく天理図書館蔵『俗語考^{草稿本}』

二十二冊をもとに、阿から許までを守部が、佐・志を冬照が、さらに守部、冬照没後、須以下を道守が浄書したものである。道守の浄書作業については、従来、都の部までが知られており、以下が行われたか否かは不明であった。本書の出現により、少なくとも能の部まで浄書されたことが判明した。全集首巻の俗語考解題には「今回俗語考を本集に収むるに方り、阿より都までは右の浄書本に拠り、浄書以前の稿本とも対照校合し、亘の部以下は浄書本が無いので、稿本にのみ拠つたのである。」(四〇頁)とあるので、すでに当時本書が見当らなくなっていたことがわかる。また、第一冊登の部末の道守識語は道守の浄書作業の年代を知る手がかりとなるものである。

(5) 絹本軸装(一一〇・五×三二・二種)、十二行。

世俗の教訓。何人に与えたものか不明。守部の世俗教訓書としては、『待問雜記』(全集第十卷所収)がある。それにはやや似た記述があり、「…交易^{アキヒ}は、不売^{ウラス}以前^{サキ}よりも、売て後の心づかひをあつくするにあり。…」(全集二二四頁)、「○客人^{マワド}をもてなすには、来し時より帰る時を篤くすべし。…」(全集二二三頁)などがある。

〔翻刻〕

後世の人の情はもはら金にありて金のために手をたる、事おほかり、金借むとする人の手を／たれて乞ふめるは金のこなたにあるゆゑなり、既に借て後返してよと又こなたより手／をたる、は金のあなたにある故なり、質物を出して金をかる、にたに金のこなたにある程は手を／乞ふめるを既にかしあたへて後は又うけてよとてこなたより手をたる、か如くにそある、あき人の／物うらむとて手をたれさま／に詞を尽すも金を得んとてなり、そを買ふ人既に金とかへて後は価高／くはあらざりしか今

少し引すへかりしをふとつけ過たり、よ所をも見合せなんものを、なとすこし後悔出て心の／内のたゆたはる、

をりのおほかるも金のあなたにわたりし故也、されはあきなひする人は此人情をよくわいたためて売らん／とする以前よりもうりて後の心つかひをあつくすへし、買し人の後悔せぬ心つかひ肝要なるそかし、さとの遊女の男の心をとら／むとするに逢ひし時のもてなしよりも別る、時のなさけに深く心を尽すといへり、家に入来るまらうとなとも来し時／よりは帰る時のもてなしをみや、かにすへし、よく此人情を得会せん人は必ず身をたて富を得ん事疑ひなし、／これ卑きさとしておのつから眞の礼にもかなふ方あれは猶あき人にもかきらぬ心つかひなるへし／処につきてさとひ言してあやしき事をかきしるしぬ 橘守部 (読点を私に付す)

(6) 本文共紙表紙(二八・一×二〇・〇糶)、仮綴。

外題「陰中詠草 東世子写」(東世子筆)。内題「陰中詠草 四十九日までの艸」。料紙、斐楮交漉紙(裏打)。墨付、

四丁。筆跡は守部に似たところがあり、東世子が守部自筆稿を書写したと思われる。

巻頭「浜子か身まかりける夜かなしみのあまりにおもひつ、ける／おもほえぬ身のぬれきぬはなきあとの涙ほしあへぬほたしとそなる／忍びてもしのひて見てもよるの鶴子ゆゑにこそはねになかれけれ」

巻末「な、七日の夜／すくよかにあるおもかけを水にうつし親おもふ子のたむけにはせむ／なみたをはこほさは魂はうれへんとおもへと袖のぬれぬ日もなし／いさや世におもひのこさておたひしく高まの原に神つまりませ」

弘化二年(一八四五)十二月七日二十九歳で没した一女浜子を悼んだ詠歌群である。『橘守部大人自筆遺稿展観入札目録』(昭和十四年)八三(六)に「陰中詠草 守部自

筆 一冊 翁の女浜子の死去せる中陰間の哀悼歌三十八首を書きおけるもの。」とあるが、現在自筆本は所在不明である。また、守部の家集『穿履集』に未収載で、従来その内容は知られていなかった(既述『千代古道次集』

卷三にも収める)。浜子の死については奇怪な噂があり、橘純一氏「橘守部翁小伝」(全集首巻、大正十年刊)、鈴木暎一氏「橘守部」(人物叢書、昭和四十七年刊)に記述があるので、参照されたい。

(7) 卍繫文様空押朱色表紙(二七・〇×一八・七糎)。外題、網目文様題簽「八十一番歌合。内題、「八十一番歌合」。料紙、楮紙。墨付、百二十四丁。巻末は、守部の識語「被講の人のよみ安き為とてなり(花押似書)」までで以下はない。

本書は本文庫蔵判詞自筆・歌坂倉千英筆本(09A-81、以下自筆本とする)とはやや巻頭の書き方を異にするところがある。自筆本は、巻頭「八十一番歌合／作者／左方」として左右の作者を列記し、ついで「読師／講師／判者」、ついで「弘化三年六月十二日」と開催年月日を記して、本文にはいるが、本書はまず「八十一番歌合／題／瞿麦露 朝氷室／寄鳥恋」と歌題を記し、「左作者」以下左右の作者を記し、ついで「読師／講師

／判者」とするが、開催年月日はない。この分類によると、本文庫蔵本(09A-81)(09A-82)(911-ト48)の三本が一類となり、本書と国会図書館蔵本(202-288)が他の一類となる。

本書は自筆本と内容を異にするところがあり、字配りも若干異なるにも関わらず、守部の筆跡に酷似する。また、和歌本文部分にいたっては、坂倉千英筆の自筆本よりも守部の筆跡に近い。一方、三十八番判詞中で、自筆本の読みにくい仮名を大事をとって空白とし、朱補する箇所がある。あるいは東世子による副本か。

一方、本書と内容を同じくする国会図書館本は、和歌一行書とし、判詞の散し書きを改めるなど、書式において自筆本(及び本書)から距離があるが、やはり守部の筆跡に酷似する(「平澤解題」一七―四五〇は「守部自筆の、或は冬照筆の副本などが存し、それからの臨模本かとも推測される。」とする)。この本は内容が本書と一致し、守部の花押似書で終わるが、三十二番と六十八番

の判詞を欠き、空白を置いている。この欠落はいずれも見開きに当る判詞部分をめぐりとばして書写した故と考えられるので、仮に本書と国会図書館本が関係を有するとしても、直接の関係は認められない（国会図書館本は欠落があることに気付いているので、めぐりとばしがあったなら、その前段階である）。

(8) 淡茶色刷毛引表紙(二七・一×一九・四糎)。外題、打付書「行草類字 全」。内題なし。料紙、薄葉。墨付、百五十三丁。印記、表紙と巻頭に「椎本文庫」。

本書は、部首別漢字くずし字辞典で、『五体字類』を思い描けばよい。まま、朱書で別体のくずし字を書き入れている。外題は守部筆と見られ、本文も確証はないが、守部筆としてよさそうである。守部が何を参照したかは不明であるが、清石梁編『草字彙』(文政十三年の和刻本あり)と類似する所がある。

(9) 卍繫文様空押朱色表紙(二三・三×一六・八糎)。外題、題簽を貼付するも空白。内題なし。料紙、楮紙。

墨付、七十六丁。印記、題簽及び本文巻頭に「椎本文庫」。巻頭に凡例がある。

凡例

一 此の書は王羲之の聖教序より歌に用ある字をいさ、か抜出て輯むた、其体に依のみなれば字形は大かたに習ひ写したり泥むへからす

一 聖教序のみならず興福寺碑周府君碑淳化帖二王帖等よりも雅ひたる字は拔そへたれと凡ての体聖教を本とせればかくはいふ也

一 同字をあまた並へ出せるは其体の広きを知せんとして但し猷之の書も稀には補ひたり

一 此書の撰みさま仮に五十音に分ちて條毎にはしめに音仮字を挙げ次に濁音次に万葉風の訓仮字をついつ末に諸の字を出す皆訓を以てあけたり

一 同し字のこれかれ出たるは仮字にも詞にも用あるを以てなり凡て字数すくなく事欠たるは強ち此

字を取るにあらず大かたの体を以て自ら諸の字に
活し用ひよとなり一日二日に習ひとりて女子とも
に押せたれば撰ひちかひも多かるへし

凡例に見るごとく、五十音順の書法帖（漢字くずし字
字典）である。凡例は、書き方、筆跡とも明らかに守部
のものと認められ、本文は、守部が書いた紙片を子女に
貼り込ませたものである。

(10) 仮綴。本文共紙表紙（二四・二×一七・〇糶）。

外題「家隆卿百題詠草」、右下に「冬照」と署名。内題
「従二位家隆卿百題」、「橘冬照上」と署名。料紙、薄手
楮紙（裏打）。墨付、九丁。末尾に「天保二^{辛卯}年」とあ
り、冬照十六歳。朱の合点、添削、評言があり、守部に
よるものと考えられる。印記、表紙に唐獅子印。

題は家隆の「家百首」（新編国歌大観番号1342―1440）に
より、暁立春から寄水まで九十八首である（書入れされ
た岸卯花を含み、題のみ書入れの初冬を含まず）。但し、
題の異同から直接『壬二集』（六家集版本）によったの

ではなく、明題部類によって題を検索したと思われる、お
そらくは尾崎雅嘉編『増補和歌明題部類』（寛政六年刊）
を用いたのであろう（『明題部類抄』（慶安三年刊）とは
相違がある）。徳田進氏前掲書に吉田家蔵『増補和歌明
題部類』には『清渚集』編纂に当って利用された痕跡が
ある旨の指摘がある（第十章、二五六頁）。

巻頭「暁立春 久かたのあまの岩とのあけかたに神代
のま、の春やたつらむ（下三句「あけかたもかくと見せ
てや春のたつらむ」と朱添削し、「よろし」と評言）」

巻末「寄水 くみて見る人をまたはや忘水世にわすら
れて過し身なれは（初句「くみて見ん」、五句「年はへ
ぬとも」と朱添削し、「おもしろし」と評言）」

(11) 第一冊、浅縹色表紙（二四・〇×一六・七糶）、
第三冊、浅縹色表紙（二二・二×一五・七糶）。外題、
題簽「椎本叢書 一（三）」。題簽の右に貼紙し、内容細
目を記す。ただし、本文と一致しない場合がある。第一
冊「左経記 春記／吉統記 小右記／上古の髪之考／撰

集歌員撰者年号弁／虫垂辨」、第三冊「五畿内志南朝／本草啓蒙／皇国学の次第／勲位の事／菫々菜考／菊池伝記／白石手簡／古文書」。料紙、第一冊、薄手楮紙（裏打）、第三冊、楮紙。但し、第三冊は、種々の用箋に書かれたものを合綴している。

墨付、第一冊、二十三丁、第三冊、七十四丁。署名はないが、後述の例外を除けば、冬照の筆跡としてよいであろう。

第一冊は、公卿の日記よりの抄出（特に主題も認められない）、および勅撰集の歌員、撰者、奉勅あるいは奏覧年次を簡略に記したものからなる。表紙細目の内、上古の髪の考、虫垂辨はない。

第三冊は、細目のごとく八種の草稿の合綴でそれぞれ料紙を異にする。順に略述すると以下のようである。

『五畿内志』より南北朝時代に関わる地名の項を抜粋。每半葉九行。十四丁。

『本草綱目啓蒙』より抜粋。末に「弘化三年壬五月廿

六日以勝鹿文庫本読早惣数合十二冊尤合冊也」とある。四周単辺（一八・二×一二・八糎）有界八行、白口単黒魚尾の印刷罫紙使用。十丁。

「皇国学はいかになさはよろしからむ平戸家士許斐？記氏主のもとよりとひけるに答」と題して、橘冬照の署名あり。朱訂あり。左右双辺（一八・二×一二・五糎）有界十行、白口単黒魚尾の印刷罫紙使用。五丁。本項目は既述『千代古道次集』巻一に収める「皇国学はいかになさはよからんと問る人あるにかりに答ふ」（冬照ノ考とする）と論旨ほぼ同一である。但し、文辞にかなり異同がある。

「勲位の事」、巻頭に「弘化三年八月廿三日稿」とある。「本草啓蒙」と同料紙。四丁。本項目は『千代古道次集』巻三所収「官製沿革」に一部類似する。

「菫々菜考」は村上忠順自筆稿。四周単辺（一九・四×一三・九糎）有界十行、版心下部に「村上氏蔵板」とする標界印刷罫紙使用。二十七丁。いくつかの考証を合

寄せたもの。

本書がここに収められている理由は不明。但し、刈谷市立図書館村上文庫には守部草稿によって村上忠順が書写した本が多数存在し、一部は守部生前に遡り、一部は明治期に下っている。また、同蔵村上忠順編『蓬蘆雜鈔』第二十九には冬照「散木集考」を収める（忠順筆、殘簡のみ）。これらにより両家の交渉が伺われる。

『菊池佐々伝記』より抜粹。無辺無界、每半葉九行。四丁。

『白石手簡』より抜粹。無辺無界、每半葉九行。五丁。
『新井白石全集』（明治三十九年刊）第五所収の「御たづね申候事」（五六四頁）に引用された高野山文書と白石の後書きに該当する。

「古文書」、巻頭に「朽木家蔵本十冊あり其内抄出す文書未詳も其まゝ、しるす」とある。無辺無界、每半葉九行。五丁。

なお、「二松学舎解題」4に、「椎本叢書」写本一冊が

ある。「橘冬照か」とされ、弘化三年の跋があるという。本書との関係は未詳。

(12) 二冊あるが、冊次はない。一冊は、淡茶色刷毛引表紙（二二・八×一五・九糎）。外題、金砂子散布目題簽「冬照雜書」。その右に打付書「歌論。六百番歌合。寄居歌談。歌合部類／井蛙抄。位署連署連判。射礼ノコト。老岐嶋ノコト／上野山田郡ノコト。十二月月草花。扶桑畧記引書／甘露寺親長卿記抄録。明倫歌集水戸公作／愚記 十二月月消息文臨本」。内題なし。料紙、薄手楮紙（裏打）。但し四種あり、以下のごとし。一は左右双辺（一八・四×一三・五糎）有界十行、黒口単黒魚尾の縹界印刷罫紙、二は、左右双辺（一七・六×一二・〇糎）有界十行、白口単黒魚尾の縹界印刷罫紙、三は四周双辺（一七・四×一二・三糎）有界十行、白口の縹界印刷罫紙、四は四周单辺（一八・一×一三・四糎）有界十行、黒口単黒魚尾の葡萄茶界印刷罫紙である。墨付、六十八丁。表紙の細目にあるように諸書よりの抜書である。

もう一冊は、淡茶色刷毛引表紙（二三・六×一六・〇

など）とある。

糧）。外題、浅縹色雲母引布目題簽「冬照雜書」。内題なし。但し、巻頭に「三輪杉巻三」とあり、途中に二箇所「三輪杉」とあり、小口にも「三輪杉考」とあるので、本冊は「三輪杉」と題する考証雑筆の一冊か（三輪杉に関する考証ではない）。料紙、楮紙、左右双辺（一八・四×一三・五糧）有界十行、黒口單黒魚尾の縹界印刷刷紙。墨付、六十二丁。他に三紙ほど綴じ込みあり。本冊は、前冊同様の抜書もあるが、考証類も多く含まれている。また、諸家からの質問への回答もある。例えば、「姉小路殿御内人田鳥縫殿守人といふ人より五十音の内イウエの三字同形同音なりいかなる故かととひにおこせたるにこたふ」「ある人の歌にかたしのくつて鳥とよめるは如何にととふ人あり」「安政四丁巳年十月五日貞安政六年四月平戸□文作を以て乾亭公御尋老公が御尋□山純山純尹取次山純」。「年賀（以下朱）安政六年九月十九日土肥國平へ答ふ」。「今山純様の事 錦所にこたふ」「平戸老公より御尋」□山取次山純

（13）本文共紙表紙（二〇・〇×一二・六糧）。外題「河海抄五十音分目案」。内題「河海抄目案」とし、「橘冬照撰」と署名。料紙、薄手楮紙（裏打）。墨付、三十丁。『河海抄』により、語彙注釈の箇所丁数を五十音順で掲出したもの。小紙片に書き、貼付する。巻数と丁数を示すが、底本は『橘守部大人自筆遺稿展観入札目録』に「九七 旧本河海鈔 全二十冊 右、一・二・三・四・八・十六の六冊は守部自筆の筆写に係り他は橘冬照・同東世子の筆なり。」と掲出する本（現所在不明）であろう。

（14）本文共紙表紙（二三・二×一六・五糧）。外題「南山独録抄 合十五卷追加」。内題「南山巡狩録拔萃」。料紙、薄手楮紙（裏打）。墨付、四十二丁。「冬照云」の頭書一箇所、「冬照案」（藍）の付箋一箇所あり。署名はないが冬照の抜書帳であろう。

内題に見るごとく、『南山巡狩録』（十五卷追加五卷、

大草公弼著、写本)の本編の抜粋である。冬照の批評等は頭書、付箋以外には全くない。

(15) 仮綴。本文共紙表紙(二四・〇×一六・五糎)。

外題、子持枠を墨書し、上下に界で分け、上に「門外／＼不出」、下に「詩集 全」とする。右下に「橋東市」の署名。内題なし。料紙、楮紙。墨付、十九丁。末尾に、「柯蔭」と署名、朱印三顆を捺す。「橋」(陽)「□□之印」「太平時節英雄嬾」(以上陰)。さらに、裏表紙に「柯蔭生」「柯蔭生」と手習あり。本文に朱の圈点あり。印記、巻頭に「榎本文庫」。

表紙署名の「橋東市」は道守であるが、巻末署名「柯蔭」は冬照であるから、冬照の書写である。本書は江戸時代の漢詩の選抄で、巻頭は徂徠、以下茶山、杏坪などが見える。「二松学舎解題」が指摘する冬照若年時文政末天保初年の漢籍、漢文抜抄の一である。

(16) 淡茶色表紙(二〇・七×一三・三糎)。外題、雲母引銀砂子散題簽「□代の古道草稿一」。「□代の古道」

は守部の著作「千代の古道」を示すと思われるが、本書は東世子の自筆詠草で内容と合致しない。以下にも同様の例があるので、表紙は流用であろう。内題なし。料紙、薄手楮紙(裏打)、四周単辺(一五・五×一〇・六糎)有界十行、柱に「池菴」の文字ある茶界印刷罫紙。墨付、三十五枚綴の四箇所計十六丁(五、七、三、一丁)に書入れる。見返しに「とせ子」の墨署名、別に、「短冊にかきて他し人にみするうたには上に○印をつけおきぬ」(朱)の書入れ。巻頭に「安政四巳年」とある。

初めの二箇所は朱の添削、評言あり。冬照によるか。三箇所目は「噫漢学者僻作歌」「冬照千秋の歌合の為にかける詞」(千秋は松田千秋か)から成る。いずれも冬照作と認められるが、筆跡は東世子、冬照いずれか不明。最後は「長鳴鳥はにはとりの事」以下三行(朱書)。これも東世子、冬照いずれの筆跡か不明。

(17) 縹色表紙(二〇・八×一三・三糎)。外題、墨流し題簽「ならのおち葉 一」。内題なし。料紙、薄手楮

紙（裏打）。墨付、三十二丁。

外題に「ならのおち葉」とあるが、しばしば表紙の流用が行われているので、これがたしかに書名とも言い難い。巻頭に「東世子哥」とある。ほとんど題詠で、年代も不明。わずかに「明治三編入」の文字があることから、明治期のものかと推測されるのみ。なお、「明治三編入」とは東世子編の『明治歌集』第三編（明治十二年刊）に入集の意かと考えられるが、入集が確認されない歌もあり、断定できない。朱の添削、評言がある。何人か不明。

(18) 桜牡丹紅葉等文様多色刷表紙（二二・七×一七・四糎）。外題、題簽「詠草四季（恋雜）」。内題なし。料紙、薄手楮紙（裏打）。墨付、各八十五丁、百四十七丁（終丁裏見返し貼付）。付箋、挟み込みの紙片あり。各冊見返しに「とせ子」と署名。

部類された東世子の家集であるが、至る所朱墨の推敲書入れがあり（前書と異なり、添削ではない）、精選されたものではない。幕末より明治一けたの年号が見える

（一部後年の書入れあり）。長歌も多い。恋雜冊の末尾近くに「富貴門答歌May」と題する長歌があり、「右父守部翁の歌」とする。

本書は『椎のこやで』（明治二年序刊）に収められる「東世子家集」と密接な関係が認められる。歌頭に朱圈点を付されるのは、「東世子家集」入集のための印である。

(19) 淡茶色地松喰鶴文様雲母引表紙（二三・七×一六・七糎）。これは『稜威言別』初印初装本（本文庫蔵9111ト95）と同一表紙である。外題、打曇題簽「藻塩草さうの歌」、その下に「東世子」と署名。内題なし。料紙、薄手楮紙（裏打）。墨付、八十三丁（終丁裏見返し貼付）。挟み込みの紙片あり。「さうの歌」とあるが、巻頭に「春部」とあり、以下雑然たる詠草である。

詠作時期はほぼ前書に継ぎ、明治一けたもあるが、概して十年代が多い。「空穂物語巻次第」のような覚書も含まれる。

(20) 浅標色表紙(二三・五×一五・五糎)。外題墨流し題簽「磯の藻くつ」。その下に「港」「渚」二字があるが、戯書であろう。内題なし。料紙、薄手楮紙(裏打)。

三種あり、一は左右双辺(一八・四×一三・五糎)有界十行、黒口単黒魚尾の標界印刷罫紙、一は左右双辺(一七・六×一・九糎)有界十行、白口単黒魚尾の標界印刷罫紙、一は四周双辺(一七・三×一・二・三糎)有界十行、標界印刷罫紙。墨付、六十九丁。挟み込みの紙片あり。朱の添削あるも、何人か不明。印記、「榷本文庫」。

幕末より明治初の詠草及び雑記。巻頭に「藤庵記 守部翁うた」とする文を置き、「慶応三年六月平戸奥歌合 廿一番 判とせ子」などもあり、平戸藩に関わるものが多い。「二松学舎解題」36に東世子の家集「いそのもくず」^(ママ)写本一冊が見え、嘉永六年(一八五三)写とするが、本書との関係未詳。

なお、『橘守部大人自筆遺稿展観入札目録』八三(イ)に「磯の藻屑 守部自筆 一冊 守部翁の詠草を集めて、冬

照が「磯の藻屑」と命名したもの。内容は、「批判詠草」と題せるものの第二・第四・第八等である。」と見えるものとは別書である。

(21) 浅標色表紙(二二・二×一四・八糎)。外題「萬葉檜枙積語例一」とあるが、おそらく表紙は流用であろう。内題なし。但し、見返しに「萬葉檜枙積語例」と書く。料紙、薄手楮紙(裏打)、四周双辺(一七・〇×一・八糎)有界十行、白口単黒魚尾の標界印刷罫紙。墨付、四十三丁(終丁裏見返し貼付)。挟み込みの紙片あり。署名はないが、東世子の筆跡と思われる。本書詠草には朱の添削あるも、誰人か不明。一部雑記を交える。年代不詳。

(22) 仮綴。本文共紙表紙(二六・六×一七・七糎)。外題「江島日記」。内題「江嶋記」。料紙、薄手楮紙(裏打)。墨付、十四丁。

明治六年三月三十一日から四月三日にかけて東世子が並木信明とともに横浜、鎌倉を経て江ノ島へ旅した紀行。

並木信明は東世子編『明治歌集』の作者で、初編（明治九年刊）「明治歌集作者姓名」に「同上（信濃国佐久郡野沢村） 字茂 同（並木） 信明」と見える。また、『橘道守家集』上の巻（一七二頁）に道守による弔歌がある。

巻頭「年の号を明治てう六とせ三月の末つかた信濃なる並木信明ぬしはろく」とはせ給ふは夢か現かたとへかたなし、手まねく玉章の行かひのみなればけふうひにまみえなからなめけさもわすれて心の限り物かたりす、旅の日数も大かたに定めたればつとめて横浜かけて江の嶋へと心さしつ」

(23) 仮綴。本文共紙表紙（二三・九×一八・〇糎）。

外題「涼の記」。内題なし。料紙、薄手楮紙（裏打）。墨付、六丁。

とせ子、まさ子、たか子、道平、久和（とせ子以外伝未詳）五人による納涼と歌会。年代不詳。

巻頭「一夜す、みかてら。よりゐてくれかれと。物かたりする序に。此比のあつさには。いかにしてよけん。

をふねうかへて。す、みとらんほかは。あらしなとひとりこつ人あるに。けによけむとて。道平ぬし久和など。す、みいて、。そ、のかすにまかせて。似けなきわさなから。あすこそはよけれと。あるしの君もいふにまかせて。さらはとておもひおきてつるは。文月の中のいつかの夜になん。」

(24) 淡茶色地松喰鶴文様雲母引表紙（二三・一×一五・六糎）。これは（18）の『藻塩草』と同一の表紙である。外題、朱色題簽を貼付するが、空白のまま。内題「道守家集」。料紙、楮紙、左右双辺（一七・八×一二・三糎）有界十行、白口単黒魚尾の印刷罫紙。墨付、四十丁。朱墨の推敲、点、及び朱合点あり。

巻首に「明治十年十月」とあるが、大半は明治十九年より二十二年の詠草である。推敲著しい未定稿。

道守にはその没後、明治三十七年（一九〇四）に妻濤子の歌文と併せた『橘道守家集』二冊（以下「家集」とする）が版行されている。本書が詠作するに従って書入

れた草稿であるのに対し、「家集」は上の巻は短歌之部で、四季、恋、雑、下の巻は長歌部、文章之部と部類されている。両者を比較すると、本書に朱の合点もしくは歌頭に墨点と朱圈点が記されている短歌が「家集」上の巻に入集していることが判明する。材料は本書のみではないが、重要な資料となっている。本書その他から精選、部類した家集があり、「家集」はそれに依ったのであるうか。

なお、「二松学舎解題」には橘道守詠草、道守家集などが見える。

(25) 浅縹色絹表紙(二三・五×一五・九糎)。外題、金砂子散打疊題簽「椎廼小枝長歌文辭」。見返し、金銀切箔散。内題「椎の小枝」。料紙、薄様、四周単辺(一七・九×一二・四糎)有界十行の緑界印刷罫紙。墨付、二十丁。中途、巻末に白紙のままの丁あり。

巻頭に道守の序がある。

この一卷はとしころよみ出たる長歌また物のはしに

かいしるしたる文詞をた、にかいやらんもあたらし
ければ見出るをり／＼かいしるしおくになむさて筆
とりそめしは明治三十年四月のはしめつかた軒端の
花さかりなるあした也 椎本のあるし 橘道守

本書は道守の常の筆跡とは異なり、自筆とは認めがたい。また、訂正もほとんどないことから、別人による清書本か。

本書は新年、春、夏の長歌、文章部として「和歌百夜草序」一篇を収める。長歌については「家集」下の巻の該当部分と順序を異にするも大幅に一致する。「家集」には続いて秋歌、冬歌、恋歌、雑歌がある。また、「和歌百夜草序」は同じく文章部に収められている。本書は直接「家集」の資料になったものではなさそうであるが、関連が認められる。

(26) 後補洪引表紙(二七・三×一九・四糎)の下に本文共紙元表紙あり。外題、後補表紙に題簽を貼るも白紙のまま、元表紙に打付書「江之島鎌倉記行／一名忍艸」、

左下に「橘道守稿」。内題なし。料紙、薄手楮紙（裏打）。墨付、九丁（除元表紙）。印記、巻頭に「椎本文庫」。明治五年二月十日より十五日にかけて道守が実父吉田錦所等と江之島鎌倉へ旅した紀行文である。末尾に「いとつさなき筆にはしるすもおふけなれと後の今を昔になして忍ふかすにもとかつ／＼かきしるすになんやかて巻の名をしのふ草とそおふせおきつ橘道守しるす」。

巻頭「現身のよの中にこゝろ行ものは海山のけはひにしくものそなき都あたりはいつくかよきとかなたこなたをおもひめくらすに江島鎌倉のあたりそよかるへきと父はらから二人みたりかたらひて明治五年二月十日の日亀井戸あたりのよもきか門を立いてぬ折しも春雨ふりそ、さ何くれとよそひする間にうまのかねうつつころに近づきぬれはいそきぬ 春雨のふりすてにくきわかかとをぬれ／＼出る春の旅人」

(27) 仮綴。本文共紙表紙（二三・三×一六・五糎）。

外題「詠草」、左下に「橘濤子」と署名。内題なし。料

紙、楮紙、每半葉四首書入れられるように短冊状の緑界を印刷した罫紙。墨付、七十丁。一部に雑記を含む。また、両見返し、裏表紙にも雑記の書入あり。朱の添削、合点あり。濤子は道守の妻。ほとんど題詠のため、詠作年代不詳。

(28) 淡紫地に桜花枝文様表紙（二三・五×一六・一糎）。外題、打曇題簽「濤子詠草 第三」。見返し、表紙に同じ。内題なし。料紙、楮紙、茅をあしらった無界の緑匡郭を有する印刷罫紙。三十三丁。後半は白紙のまま。年代不詳。

以上二書とも『橘道守家集』に付載する「橘濤子家集」との関係は認められない。

「二松学舎解題」44に「濤子詠草」写本一冊、明治二十九年写がある。

(29) 浅緑色地流水桜花紅葉文様表紙（二三・六×一六・五糎）。外題「橘守枝詠草 第二集」。内題なし。料紙、

(27) 濤子詠草と同じ緑界印刷罫紙。墨付、五十丁。後

半は未記入のまま。まま歌頭に朱墨の圈点あり。

巻頭に「明治二十八年一月」とあり、明治三十年に及ぶ。橘守枝は「二松学舎解題」の橘家家系図には見えな
いが、『橘道守家集』上の巻（一七四頁）に「明治三十
年四月廿一日守枝のみまかりける時 老の坂こえ行をり
に杖としたのむ我子にさきた、れけり」とあるので、
道守の子（娘と思われる）で明治三十年（一八九七）に
没したことがわかる。「明十入」と書入れる歌があるの
は『明治歌集』十編をさすか。但し、十編が刊行された
か否かは不明。

○・五糶）折帖。香色地芒文様雲母引表紙（一九・三×一
外題「詠草」、右上に「済」の墨書あり。内
題なし。料紙、楮紙。墨付、十九折。朱の合点、添削、

付、天理図書館蔵橘守部関係資料一覽

以下に掲げるのは、本文庫とならんで多数の守部自筆稿本を
所蔵する天理大学附属天理図書館の守部関係書一覽である。そ

評言あり。筆跡は東世子に類似するところもあるが、誰
人の詠草か不明。評点者も不明。

(31) 茶色表紙（一七・八×二一・六糶）。外題、内題
なし。見返し、紅色紙。料紙、薄様、四周双辺（一四・
四×九・四糶）、上下に欄を分かち、上欄は無界、界高、
二・六糶、下欄は有界十行の白口単黒魚尾の紅界印刷罫
紙。巨郭外に「藤井版」と印刷。墨付、五十八丁。中途
に白紙の丁が多い。

明治二十五年より三十四年までの詠草。詞書は人事に
及ぶが誰人か不明。男性と考えられるが、道守ではない。
広島から大阪に転居するなど、関西在住。一括購入した
中に含まれていたが、橘家類縁の人のものか否かも不明。

れらは『天理図書館稀書目録第一〜第三』（昭和十五、二十六、
三十五年刊）に解題があり、平澤五郎氏「橘守部撰述諸稿本と
その成立に就いて（一）（三）」（『斯道文庫論集』第十七、十九、二

十輯、昭和五十六年二月、五十八年三月、五十九年三月、以下平澤解題とする）にも内容に亘る解題がある。

しかしながら、天理図書館ではそれらのほとんどを「橘守部稿本集」（函架番号〇八一―イ三）の名称の下に一括して叢書扱いしており、稀書目録には出納の際の小番号が付されていない。また、平澤解題には函架番号が一切付されていない。このような点に鑑み、天理図書館の「橘守部稿本集」の細目を示し、さらに平澤解題との対照表を掲げることとする。その他、天理図書館所蔵の主要な守部関係書を併せて掲げた。ここで末尾に「一九一七三」とあるのは、該書の解題が平澤解題において「斯道文庫論集」第十九輯七十三頁にあることを示すものである。

なお、「橘守部稿本集」の186以下は、近年整理されたもので、稀書目録には登録されず、平澤解題にも未記載である。

橘守部稿本集（〇八一―イ三）

1～8 稜威道別 八巻

八冊 一九一七三

	9	〔稜威道別異本〕	一冊	一九一二九
	10	神代直語 三巻	一冊	二〇一七六
	11～12	神代直語 二巻	二冊	二〇一八二
	13～15	稜威言別記 <small>歌解草稿</small> 三巻	三冊	一七一三二
	16～21	万葉集檜婦手 六巻	六冊	一七一二四
	22	万葉集檜婦手別記	一冊	一七一二六
	23～25	神異例 三巻	三冊	二〇一六六
	26～30	稜威雄詠 五巻	五冊	二〇一三六
	31	神楽歌入文 存巻二	一冊	一七一二九八
	32	催馬楽入綾 存巻四	一冊	一七一三〇〇
	33～54	〔俗語考草稿本〕	一二冊	二〇一二五
	55～67	〔俗語考浄書本〕	一三冊	二〇一二六
	68～79	〔雅言考草稿本〕	一二冊	二〇一三三
	80～135	類語品彙	五六冊	二〇一二四八
	136～140	古事記伝考異 五巻	五冊	一九一八七
	141	古事記伝考異 存巻一	一冊	一九一八二
	142～144	記伝概言 三巻	三冊	一九一八一

145	148	記伝概言	四卷	四冊	一九—一七五	171	175	蒙古諸軍記弁疑	五卷	五冊	一七一—三四六
149	154	勝地徒跣	七卷	六冊	二〇—二五九	176		長歌撰格稿本	存卷上	一冊	一七一—一四八
155		三大道弁(草稿本)		一冊	二〇—一一四	177		待問雜記	二卷	一冊	一七一—三六七
156		三大道弁(終稿本)		一冊	二〇—一一四	178		てにをはわらはのさとし		一冊	二〇—二七〇
157		神代卷古今顯要鈔		一冊	二〇—二八八	179		讚大江戸歌並短歌		一冊	一七一—四〇一
158		〔神代紀心覺〕		一冊	一九—一五一	180		催馬楽〔注〕		一冊	一七一—三〇二
159		〔神代紀索引〕		一冊	一九—一五二	181		神楽歌		一冊	一七一—三〇二
160		〔古事記夜都米佐須の歌の弁〕		一冊	二〇—二八六	182	185	稜威道別	存卷六—九	四冊	一九—九五
161		〔菊之名之考〕		一冊	二〇—二八五	186		万葉集秀歌		一帖	
162		上古の髪之考		一冊	二〇—二八三	187		歌論諸抄抜粹		一冊	
163		古代の髪之考		一冊	二〇—二八〇	188		諸家文章抜粹		一冊	
164		〔続難語考殘簡〕		一冊	二〇—二〇九	189		暗書三		一冊	
165		神蹟考		一冊	二〇—一七三	190		机上雜載		三冊	
166		花笈箒		一冊	二〇—二八七	191		〔雜載〕		一冊	
167	168	〔古今和歌集註〕	二卷	二冊	一七—三〇七						
169		当用新撰往来		一帖				長歌撰格	二卷	二冊	九二、三—イ三五
170		三十六歌仙歌		一帖				湖月鈔別記	二卷	二冊	九三、六—イ三三
											一七一—三三八

〔湖月鈔別記殘稿〕

一冊 九三、三〇—イ、四 一七—三三三

稜威雄詰 五卷

二冊 二三、六一—三

旧事紀直日大牟禰

一冊 三〇、一一—六一 一九—一五八

難古事記伝 五卷

二冊 三〇、一一—六九 一九—一七〇

短歌撰格 存卷上

一冊 九二、二—三〇三 一七—一七一

百人一首越家裏 二卷

二冊 九二、二—六二 一七—三三九

神楽催馬楽入文

一冊 九二、五—三

伊勢物語箋 二卷

一冊 九三、三—四 一七—三三四

箱根日記 三卷

一冊 九四、六—三五九